

J・ボージウ・ガルニエ著

『人口地理学』

Jacqueline Beaujeu-Garnier. *Géographie de la Population*. Paris: Editions M. Th. Génin, Tome I. 1957. 490 p., Tome II. 1958. 574 p.

I

「人口地理学」と題する本書は上下2巻、総ページ1000ページ余の大作であって、経済社会地理学叢書の1巻として出版された。人口地理学とは、地球上への人間の出現、その数、性質、分布状態、移動状況、居住地域の自然に加えた変化などを研究する学問であるとされる。人間は生存のため計画的にその環境を改善してきたのであって、人間労働の痕跡は地球上いたるところに遺されている。著者はこのような人間労働の成果を分析し、これをつくりだした人間についてその種、性格、人数、出生率、死亡率、年齢構成、男女比などを明らかにし、それが形成する地域社会の過去、現在、未来の姿をとらえることを試みる。本書はこのため豊富な統計資料を用い、歴史的、考古学的研究を参照しながら、世界の各地域に居住する人間集団あるいは経済社会の成長を人口学的、地理学的立場から分析しており、主として地域社会の住民、自然条件が経済に及ぼす影響に視点を向けているのである。地域研究、とりわけ低開発地域の研究を行なうに当たって無視できない問題は経済、政治、社会の諸現象が複雑な相関関係をつくりあげていることであって、研究者は社会科学の各部門に精通しなければならぬ。本書は政治という問題は捨象しているが、人口学、地理学の側面から地域社会を解明しようとしており、地域研究の一方法として注目に値しよう。近くイギリスで本書の英語版が出版される予定である。

著者ジャクリス・ボージウ・ガルニエは1917年フランスのオート・ルワール県ピュイに生れ、1948年「モルヴァンの自然研究」によって学位をえた。現在リール文科大学教授であって、同大学地理学研究所長を兼ね、またソルボンヌ大学でフランス文明論を講義している。著書には *L'Économie de l'Amérique Latine* (拙訳、『ラテン・アメリカの経済』白水社)、*L'Économie du Moyen-Orient, Le Morvan et sa Bordure, Le Relief de la France, Image Économique du Monde* など経済地理に関する著作が多い。

II

上巻においては白人の居住地域をとりあげヨーロッパ、南北アメリカ、大洋州について論ずる。ヨーロッパについてみれば、第1章で死亡率の減少、出生率の変化、ヨーロッパ内での移住などの諸現象にみられる人口的革命を論じ、第2章においては都市化と工業化、大都市の出現をとりあげてヨーロッパにおける稠密人口の形成過程を解明する。第3章では20世紀中葉における人口上の諸現象を、第4章では人口面での閉鎖性、フランスを中心とする産児制限、住宅施設の諸問題を論ずる。

次にヨーロッパ系人種の居住地域として南北アメリカおよびオーストラリア、ニュージーランドをとりあげる。アングロ・サクソン民族の居住地域であるアメリカ合衆国については、人口の形成と移動、自然環境、都市の発展、黒人問題、諸産業の生産性を、カナダについてはイギリス人およびフランス人の共存、西部の征服と人口分布、工業国としての発展を論ずる。

主としてラテン民族が移住したラテン・アメリカについては、この地域の住民が地球上のあらゆる人種の混血、融合によって形成された点に大きな特徴があるとする。すなわち他の地域に移住した白人は、たとえ土着人と隣り合って暮し、あるいは黄色人種や黒人の支配地域に居住している場合にも、土着人との間には必ず厚い壁をつくっている。それにもかかわらずラテン・アメリカにおいては白人があらゆる他の人種と血を混えているのであって、かくも多様な混血人が存在する土地はほかにはみられない。これがラテン・アメリカの社会発展を支配する本質的要素であって、将来混血種族が一層その数を増し、ラテン・アメリカにおいて支配的勢力となるに至るならば、世界史におけるラテン・アメリカの地位に決定的な変化を生ずるのであろう、という。

第1章「人種と住民」においては混血人口の起源を論じ、紀元前2万年ないし1万年の間に行なわれたとみられるベーリング海峡を経由するアジアからの移住および太平洋上の諸島を経由する移住によって、原住インディアン人口が形成されたとする。15世紀コロンブスの新大陸発見にともないスペイン人、ポルトガル人が移住し、アフリカ黒人の輸入が行なわれ、19世紀初頭ラテン・アメリカ諸国が独立したのちは世界の各地から多数の移民が流入し、複雑な混血人口が形成された。第2章「人口の分布と移動」においては、不規則な人口分布をもたらした原因として第1に自然条件、とくに気候をあげる。

亜熱帯地域における湿気を伴った暑さが人体に与える影響、なかんずくヨーロッパ人に与える悪影響を述べ、文明に挑戦する密林についてはアマゾンにアメリカ人が造ったフォード・ゴム農園失敗の例をひいて、いかにアマゾン流域の森林開発が困難であるかを論ずる。第2の理由として歴史の遺産をあげ、侵入したスペイン人が労働力の必要から原住民人口の稠密な地域に定住した事情を明らかにする。ついで人口分布の型を示し、人口の移動については農村から都会への動き、東部海岸から内陸部へ、山岳部から西部海岸平野への移動、アンチール諸島から中米あるいはアメリカへの移動を述べる。

第3章「最近の人口動態」においては、人口の増減に影響する諸要因として飢饉、食糧事情、衛生、自然増加をあげる。食生活の貧困は民衆の健康をいちじるしくこない、種々の疾病の原因となっているが、最近死亡率は次第に低下してきた。他方出生率はなお高く、人口構成はいちじるしく若い。人口増加率は依然として高いので、増加する人口に食糧を供し、あるいは雇用の機会を与えるなどの経済上の問題を生ずる。農産食糧の生産を増加するためには特に土地所有制度の改革が必要とされるが、土地再分配を実施した国の実情をみると、再分配後の農業指導が充分行なわれなかったためかえって農業生産の低下をもたらした。したがって農地制度の改革に当たっては技術的條件の整備が深刻な問題となる。また未開発の可耕地が多いので、開発を進めることにより可耕地面積を拡張し、農業生産を増加しうる余地はなお大きい。

農村から都市への人口移動はラテン・アメリカに広くみられる現象である。しかしこれら農村からの逃避者が都会で満足できる職業をみつけないというわけではない。逃避は農村の生活条件があまりにも低いために生じた現象であって、農業賃金はブラジル、メキシコで平均して工業賃金の3分の1にすぎない。工業化によって職をうる人々の数は増加しているが、工業労働者としての適格性をもつ人口はごく少なく、技術者も不足していることがラテン・アメリカにおける経済構造の変容に大きな障害となっている。これらの点について著者は詳細な統計資料を駆使し、地域経済に影響を及ぼす自然と住民の諸条件をきわめて詳細に分析し、説得力ある論議を展開している。

Ⅲ

下巻においてはアフリカ、中東、湿潤アジア、社会主

義諸国をとりあげる。湿潤アジア地帯の人間生活の特徴として著者は第1に貧困をあげ、農民は飢えと貧困の極限で生活しているという。次にこの地域で米が極めて重要な役割を演じていることを指摘し、極東における貧困の万能薬であるという。飢饉にも耐えて多くの貧しい人々が生存を続け、アフリカ人なら当然死んだであろう苛酷な条件のもとでも生活しているということは、一にこの神秘的な穀物に負っている、と米が東南アジアの住民の生活と切り離すことのできない関係にあることを強調し、日本についても米食民族である点を特記している。米と小麦の栄養価の比較はさておき、米と東南アジア民族との関係についての記述はわれわれからみて奇異の感がなくもないが、これがフランス人の東洋に対する一般的理解であろうか。

次いで日本に言及し、日本はイギリスに似て大陸から海によって隔てられ、アジアにおける近代化の先駆者となり、その技術水準は近隣諸国の水準をいちじるしく上回っていると述べ、それにもかかわらずその経済と技術の進歩は創造によってもたらされたものではなく、模倣の段階にとどまっていることを指摘し、日本の歴史を概観してその経済の急速な発展は、財閥のような強力な金融集中機構と低賃金によってもたらされたものであるという。

過剰人口の問題については、これが日本人の生活のすべてに影響しているとし、入学試験あるいは就職試験に脅やかされる青少年、インテリ青年の自殺などの例をあげている。他方過剰人口問題の解決のために最近とられている人口政策、すなわち出生の自発的制限は多くの憂うべき現象を生じていることについて述べる。1つは人工流産が母体に与える悪影響であるとし、日本における出産制限の実情を細かく分析してあまりにもデスペラートな政策がとられていることに筋きの声をあげている。他は出生率の減少による人口構成の老化であって、将来の経済成長に問題をなげかけると警告している。

著者のアジアに対する理解にはなお問題があるが、フランス人、しかもフランスでも珍しいとされる女性大学教授のわが国人口政策に対する批判はかなりきびしく、われわれが日常の事件としてその重大性を往々にして見すごしているような社会問題を鋭く指摘しているのである。

(アジア経済研究所調査研究第3部 大原美範)